

経営を語る

— 夢とロマンと使命感 —

小松昭夫

経営を

語る

—夢とロマンと使命感—

小松昭夫

小松昭夫

小松電機産業株式会社代表取締役

人間自然科学研究所理事長

中庸

— 偏らざるをこれ中といい、易わらざるをこれ庸という

—

(「経営者会報 1997 年 11 月号」掲載)

自分がおかれている環境をいったん肯定し、人の縁によって現在の自分がある、つまり生かされていることを自覚する。同時に、人類究極の目的に向って、状況に応じ「生かされながら生きる」。これが私の考える「中庸」である。

私は四〇代になって、この言葉を強く意識するようになった。

いまある私は、たくさんの方々との出会いと縁の賜物であり、感謝にたえない。一方、ゼロから事業を立ち上げてきた歩みは、既得権と因習の壁を臨機応変に突破していく戦いの連続であった。その人生の途上において、いかに生きるべきかを模索するなかから、「天寿が全うでき、人々が楽しく愉快に生きられる、継続可能な社会の創造」が人類究極の目的にあると見出した。

一個人と同様、人類の歴史もまた人の出会いに満ちて

いる。反面、天寿を全うできる社会の創造を目指す過程で、飢餓と戦争という非人間的な状況が繰り返されてきたのも事実である。

しかし、いまや先進国をはじめ世界は、科学技術の急速な進歩によって、飢えと殺戮の恐怖から解放されようとしており、人類究極の目的を追求できる環境が整いつつある。目的を具現化するための目標を定め、行動を起こすべきときにきている。

私は出雲における「人と縁の感謝・戦争の歴史記念館」「未来を開く研究所」の建設構想を中心とする三大プロジェクトを通じてパラダイムシフトを進めたいと考えている。これは「中庸」の考え方から生まれたものである。